Pusar（第九十九頁）に見え、氏は之を yükün（跪拜する）の古體と解釋したれども、然もこれ普通に yoqmak と書かれ、今日もチャガタイ語に yük-（Radloff, Versuch eines Wörterbuches der Turk Dialecte）yigh-（Shaw, A Vocabulary of the Language of E. T.）といくる語に相當するものにして「集積す」の意なること、此の經の第百三十九行に於て認むるが如し、されどこゝに見ゆる yükmäk（yoqmak）を「集積す」と解き、「八集陽神呪經」と譯する時は、何の意なるかを知る能はざるべし、抑も八陽なる語に就て考ふるに此の經中に八陽經なる名の由來を說きて（漢文のものを記すれば）「八者分別也、陽者明解也、明解大乘空無之理、了能分別八識因緣空無所得、又云八識名爲經、陽明爲緯、經緯相交、以爲經教、故名八陽經。八者是八識、……明了分別八識根源空無所有……」と曰へり、之によりて考ふるに、yükmäk は今のチャガタイ語の yuqmak 卽ち「感ずる」（to touch, to affect. Shaw, A Vocabulary of the L. of E. T.）に相當するものに非るなきか、もし然らば八感明解或は八感陽明の意と解し得べきなり、而して八感卽ち八識の名は經中第百二十行以下に於て之を解けり。また（(II) bükülük）は回鶻語普門品中にも見ゆる語にして、神通力の「神通」に當てたり、ラドロフ氏は「賢」（Weisheit）なる名詞なりと說けど、思ふに誤りにして、神 supernatural なる形容詞と見るべきなり。

二　飜譯の原本

既に前項に見たるが如く、題して佛說天地八陽神呪經といふよりして考がふれば、其の初めは印度に於て佛の說きたる所にして、漢文のものも、回鶻文のものも、等しく何れかの國語よりして之を飜譯したるものならざる可ら